

今年度の事業展開について

－浜名湖花博出展標本の保存事業も含めて－

事務局

昨年度から行われている静岡県による自然学習資料保存事業は今年度まで継続され、本 NPO が継続してこの事業を受託して行うことになりました。5 月に正式契約が行われ、6 月 1 日から今年度の事業が三島で開始されました。この事業は、自然環境の変遷についての理解と自然との共生をめざした施策のための基礎資料となり、私たちの望む自然史博物館の基礎標本にもなります。

しかし、この事業は国の雇用対策事業で行われているため、雇用対策事業が終了する今年度限りで終了してしまいます。本 NPO ではこの事業の継続を県に強く要望していくとともに、本来の問題である自然史博物館設立へ向けての活動をさらに強く推進することが、今年度の重要な活動となります。

そのためには、県や県民のみなさんに、標本保存事業や自然史博物館設立についての目的と現在の活動を十分に知っていただき、理解と協力を求める活動が重要になると思います。具体的には、県に対する要望書の提出と、8 月に三島の資料保存室で「ミニ博物館」を開催するなどの計画があげられています。

近年、自然環境の重要性は訴えられているものの、自然環境の変遷を知るための具体的な基礎資料となると、実際に静岡県にはほとんどない状況です。たとえば、静岡県の生物分布について最近になって絶滅危惧種や貴重種の調査が行われ、レッドデータブック (RDB) が発行されました。しかし、その調査でさえ対象となった生物標本を保存することがまったく行われていません。

RDB の標本については、調査者個人で保管している場合が多く、また調査データ自体も含め、このままでは散逸する可能性もあります。これに対して、本 NPO では RDB の調査委員会や自然保護室に呼びかけ、標本とデータの緊急的な保存と確保を提案しています。

2004 年 4 月 8 日～10 月 11 日まで開催される

しずおか国際園芸博覧会/第 21 回全国都市緑化フェア浜名湖花博では、静岡県内の植物も含め、世界または日本全国から数多くの植物が出展されています。植物に関する研究調査では、多くの種の標本が必要であり、この機会に園芸種も含め数多くの植物の標本を保存収集することができれば、静岡県は植物について参照できる大きなコレクションをもつことができます。また、浜名湖花博に出展された協力団体に対して出展された標本を後世に残すという顕彰の意味でも、標本保存事業は重要です。

このような博覧会の開催後に、「開催しっぱなしで、将来に廃棄物以外何も残さない。」というような批判が聞かれることがあります。浜名湖花博を県の総合計画の中で、学術的にも教育的にも意味ある博覧会としても位置づけ、今後の「人づくり」や「ものづくり」のための県行政の資産として標本を残すことにすれば、そのような批判は聞かれないと思われます。

1990 年に開催された大阪花の万博では、出展されたほぼすべての植物の種類が大阪市立自然史博物館によって標本にされて保存され、その 2 年後に登録標本目録も公表されました。この例からも、本 NPO では静岡県に対して浜名湖花博に出展された植物の標本づくりを要望してきました。

花博がすでに開催した 4 月になり、この要望が具体的な花博の事業として動きだしました。まだ、正式な契約には至っていませんが、県との何回かの打ち合わせののち、すでに標本収集と一次標本作製のための作業が花博会場で始まっています。この事業については本 NPO がほとんど受託して行うことになり、これも本年度の大きな事業となりました。

これらの事業も含め、今年度は静岡県における今後の自然標本の保存と自然史博物館設置推進にあたって、また本 NPO の今後の活動にとっても重要な年度となります。会員のみなさんのご協力をよろしくお願いいたします。

静岡県の保護すべき動植物 ー静岡県版レッドデータブック発行とその活用ー

北野 忠



コーディネーターの杉山恵一委員長



山口氏はじめ各部会長によるコメント

平成 16 年 4 月 25 日（日）午前 9 時半から 11 時まで、静岡市清水テルサ 6 階大研修室にて、静岡県自然史博物館ネットワークの総会のパネルディスカッション「静岡県の保護すべき動植物ー静岡県版レッドデータブック発行とその活用」が開かれました。

今回は、コーディネーターとして静岡県自然環境調査委員会委員長の杉山恵一先生、パネラーとして静岡県レッドデータブックを企画された静岡県自然保護室の山口章一氏、静岡県自然環境調査委員である杉野孝雄先生（植物部会長）、三宅 隆先生（哺乳類部会長）、板井隆彦先生（淡水魚類部会長）、高橋真弓先生（昆虫類部会長）においでいただきました。それぞれの立場から、レッドデータブック作成までの苦労話や、分野ごとでの野生生物の現状についてのお話をいただきました。

この要旨は、コーディネーターおよび各パネラーの方々のお話に基づき、まとめたものです。

杉山恵一先生からは、全国版レッドデータブックが発行されたものの、各地域によって状況が異なることから、各都道府県など各地域のレッドリスト作成の作業が行われてきたこと、静岡県は中でも遅い部類であるという紹介をいただきました。また、本調査の結果、メダ

カのように、かつては普通種であったものが現在希少種となるなど、静岡県の自然も大きく様変わりしてきている現状を踏まえ、標本やデータの管理という点でも博物館の重要性を説かれました。

山口章一氏からは、本事業が平成 9 年度に予算化し、100 名を超える調査員による 6 年間の調査の後、出版に至った経緯をお話いただきました。また、本県のレッドデータブックの特徴として、「要注目種を入れたこと（本県独自のカテゴリー）」、「カテゴリー区分に応じて保護方針を記載したこと」、「種に対してではなく地域全体を保全する必要性があることから、今守りたい大切な自然を 10 ヶ所限定で記載したこと」を紹介いただきました。また、本書発行の目的として、大規模な工事に対する構想段階からの検討や、環境教育に役立てたいとのことでした。

植物部会長である杉野孝雄先生は、県内で確認されている在来種の植物のうち 22.4%が絶滅の危機にあること、さらに本調査によってすでに 65 種が確認できず、絶滅もしくは現状不明の危機にあることをお話されました。また、減少の原因として、園芸採集によるもの、開発によるもの、里山や水田の管理放棄によるもの、高山植物の温暖化？もしくは登山者の増加？

によるもの、シカの食害によるもの、水田の農薬使用をあげられました。

哺乳類部会長である三宅 隆先生は、今回は15種類をレッドリストとし、そのうち6割にあたる9種がコウモリの類であったこと、ヤマネやモモンガを例に、小型動物が人知れず減っていること、ツキノフグマの分布が断続的となり特に富士山地域の個体群が陸の孤島状態となっているなど、県内の哺乳類の生息状況をお話いただきました。また、調査対象である哺乳類を野外で発見すること自体が困難であり、調査が思うように進まなかったという苦労話もされました。このほか、野生生物の分布、および生息状況に関する調査を本書発行により終了するのではなく、今後も調査を継続していく必要性を訴えられました。

淡水魚類部会長である板井隆彦先生は、県内の汽水・淡水魚の減少の原因について、外来種が在来種の生息に圧力をかけていること、宅地や工場などの環境の悪化、河川のコンクリート化、河川と水路の落差による移動の不可などをあげられました。また、県内の西部、中部、東部、伊豆の4地域は、それぞれ異なる魚類相で構成されていることから、静岡県のカテゴリーに加え、4地域ごとのカテゴリー区分を設けたことを、汽水・淡水魚編の特徴として紹介され

ました。このほか、魚類の調査にあたっては、網で採集した後に個体を確認しなければ種が分からないこと（観察だけでは不十分で、採集することが重要）、同じ調査場所でも複数回の調査で初めて確認される種もあり、同地点での調査の繰り返しが必要であったという苦労話もされました。

昆虫部会長である高橋真弓先生は、まず、昆虫は種類が多く、これまで県内では6463種が確認されているというお話をいただくとともに、分野ごとの専門家が必要であったことを紹介されました。また、里山、海浜、河原、草地に生息する昆虫の減少を紹介されました。さらには、多くの昆虫は単に観察しただけでは種を確認できず、そのため標本が必要であること、標本の保管の必要性とともに、調査者の高齢化が進み、今後標本の散逸の危険も考えられることから、博物館の必要性を説かれました。

その後はフロアーの参加者からの質疑応答があり、個人ではなく公共機関による標本管理の重要性、今後の調査の継続性、研究者の高齢化にともなう後継者の育成、絶滅に瀕した生物の保護に関することなど、活発なご討議が交わされました。これらの問題点を解消するには、やはり博物館の存在が必要であることを強く感じたディスカッションでした。



レッドデータブック普及版(左)と植物編と動物編

施設見学と自然観察会報告
奇石博物館と富士山東臼塚

横山 謙二



案内者の山本さんと北垣さん（中央のふたり）

5月30日（日）、富士宮の奇石博物館の見学と富士山東臼塚周辺の自然観察会が行われました。今回は特に、博物館と周辺の富士山火山噴出物などについて、山本玄珠氏と奇石博物館の北垣俊明学芸員に案内をいただきました。

当日は雨天の心配がありましたが、午前・午後ともにほとんど雨に降られることもなく、むしろ午前中については、汗ばむほどの暖かい陽気にめぐまれました。

自然観察会では、予定を変更して午前中に東臼塚付近に分布する日本ランド溶岩、小天狗溶岩、東臼塚溶岩を観察しました。東臼塚溶岩には、直径60cm以上、深さ1mほどの空洞がいくつも見られました。これは、東臼塚溶岩流によって燃やされた木の跡だそうです。この木の跡は、この付近では、700以上も分布しているそうで、この溶岩流の流出による被害をうかがわせます。

午後は、大沢付近に分布する火山の噴出物の観察と奇石博物館の見学を行いました。

大沢付近に分布する火山噴出物の観察では、大沢スコリアの下位にみられる火砕流堆積物を観察しました。この火砕流堆積物中には、火砕流によって燃やされた森林の炭化した立木が観察できました。こうした、火砕流中で、立木のままで、地層中に保存されているのは、とても珍しいそうです。



溶岩によって焼かれた樹木の跡



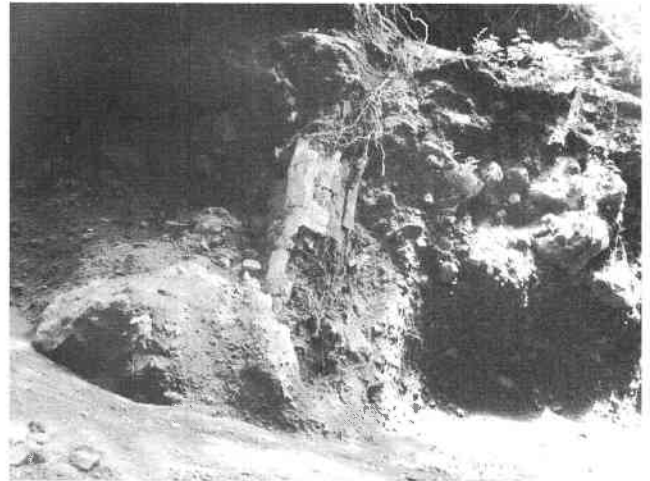
露頭を見学している参加者

今回の自然観察会では、静岡県および日本の象徴的な富士山は、一見不変的なものと思われていますが、実際には寄生火山の噴火や火砕流の発生を繰り返し、いつまた噴火するかわからない、生きている火山であることを実感させられました。富士山だけではありませんが、火山噴火発生時の被害の予測や予防を行うにあたり、こうした溶岩流や火砕流・泥流に関する調査が重要であると感じました。また、研究や普及活動のために、こうした溶岩流や火砕流におそわれた古森林の保存の必要性も感じました。

自然観察会後、奇石博物館の館内見学を行いました。奇石博物館は、多くの自然史博物館で



大沢スコリアの下位の火砕流堆積物の露头
(黒く見える部分)



火砕流堆積物中に見られる炭化木

見られるような、地史や岩石の分類学にそった展示にはこだわらず、展示ケースごとに伝説や人のコレクションなどのテーマにそった展示解説が行われていました。展示物は、ほとんどが実物標本で、学芸員によって集められてきたものも利用されていました。また、月ごと週ごとに展示物を変えるコーナーもあり、何度来ても楽しめるように工夫されていました。

奇石博物館は、博物館の名前どおり、奇妙な

石・奇跡的な石があり、石と言うものを多方面で観察できる面白い博物館でした。最後に、この博物館のおすすめのお土産は、オリジナルトイレット・ペーパーです。このトイレット・ペーパーは、地球の歴史の46億年が46メートルにわたって描かれています。使用するのがもったいないように思われますが、使用することによって地球の歴史が勉強できるようになっているユニークなミュージアム・グッズでした。

図書紹介

地球生物学

地球と生命の進化

池谷仙之・北里 洋 著

東京大学出版会 228 ページ 3000 円



地球科学、特に地史学の分野で、一般向けまたは大学での基礎学習に活用できるよい教科書が最近ないことに私は悩んでいましたが、この本はその私の悩みを解消してくれるものになりました。

この本は、現在は法人化のため改組されてなくなったものの、地球と生物を融合した分野として、1995年に創設された静岡大学理学部生物地球環境学科の創設理念にしたがってつくられています。内容は、著者たちの学科での入門的な授業科目といくつかの専門科目の講義録が下敷きとなっているためか、地球と生命の歴史やそのかわりについて、語りかけてくるような印象で、たいへんわかりやすく書かれて

います。各章に配置されている Box (かこみ記事) やイラストも楽しく、地球科学や生物の歴史にあまり関心のない方でも、おそらく気楽に読むことができると思います。

地球科学や生命科学についての最近の研究の進展には目を見張るものがあり、それらを全般的に理解するためにも、お勧めの一冊と言えます。

(柴 正博)

静岡県の昆虫 (5)

ラミーカミキリ

平井克男



レッドデータブックにみられるような、棲息の危機にある昆虫が実に多い中であって、現在なお分布域を拡大し続けている昆虫もいます。そのひとつがラミーカミキリというカミキリムシです。体長は 1.5 cm くらいで、上翅は青緑色か黄緑色に黒の斑紋のある美しい色彩をもつ「動く宝石」と呼ぶにふさわしい種類です。ラミーカミキリは江戸時代後期のまだ鎖国の続いていたころ中国から長崎に侵入し、以降日本の各地に広まっていったと言われる外来昆虫です。現在は、中国、ベトナム、関東以西の日本各地に分布しています。

成虫はラミー、ムクゲ、ヤブマオ、カラムシなどの植物の生葉や茎を後食し、雌は寄主植物の葉や茎に産卵します。幼虫は根に入り、5 月から 7 月に成虫がこれらの植物の葉上でよくみられるようになります。

多数のラミーカミキリによる後食のためカラムシがしおれ、葉の裏の白い部分をよくみせていることがあります。カラムシは茎を蒸して皮をはぎとり、その繊維で上質な織物がつくられ、夏の衣服として利用されてきたためか、人里に近い山道脇によくみられる植物です。また、チョウのアカタテハの食草として知られています。花がきれいなムクゲも家の庭木として、あちこちに植えられています。このため、ラミーカミキリは人里近くで少し注意してみると普通に観察できます。しかしながら、1980 年代以前の静岡県内での棲息記録は見あたりません。そこで、どこからいつ頃静岡県に入ってきたのかをいろいろ調べてみました。

すぐ隣の神奈川県東部の湯河原、小田原では 1979 年より記録が増え始めましたが、県内では 1981 年熱海市の記録が最初で、その後 1990 年代に入って県東部から中部にかけて逐次記録が現れ始めます。1990 年に賀茂郡東伊豆町、田方郡大仁町、駿東郡小山町で、1991 年に庵原郡由比町で、1992 年に庵原郡蒲原町、富士川町で、1992 年に (旧) 清水市で、1996 年に静岡市、焼津市で確認されました。以降、県中部地区を中心として調査を実施してみたところ、静岡市安倍川流域では、カラムシのある上流域の静岡市新田まで下流域から確認でき、大井川流域ではカラムシのある寸又峡温泉、

本川根町、中川根町、島田市でも確認されました。県西部でも 1990 年代以降、浜松市、天竜市、引佐町、水窪町などで確認されていますが、これらは愛知県から入りこんできたかかもしれません。

地球の温暖化が言われている昨今、ラミーカミキリの寄主植物のカラムシ、ムクゲは減少する植物とは思えませんし、この暖帯系カミキリムシの分布域は更に拡大していくものと思われる。



静岡県の哺乳類 (1)

森のねぼすけ

ヤマネ

春田亜紀



つぶらな大きな瞳、まん丸な体に、フサフサの尻尾。体重は約 18 g、体長は約 8 cm。大きな森に棲む、小さな小さな生き物、それがヤマネです。静岡県の森にこの愛らしい生き物が棲んでいると思うと心がウキウキします。

「氷鼠（こおりねずみ）」「山凍子（やまとうし）」「死寝鼠子（しねねこ）」「冬眠鼠（とうみんねずみ）」「怠鼠（なまけねずみ）」「鈍（のろ）」「毬鼠（まりねずみ）」「玉鼠（たまねずみ）」「火鼠（ひねずみ）」「山栗鼠（やまりす）」。これはみんな、地方の昔のヤマネの呼び名。読めますか？これらの名前からもわかるように、ヤマネはとっても「ねぼすけ」と言われています。昼間や冬の間は樹洞や木の股などを利用して、マリのようにまん丸くなって眠っています。冬眠中には湿度の高い場所で、体温を低くして凍ったように眠るそうです。（この冬眠のメカニズムは現在も国家プロジェクトとして研究が行われていて、将来は人間に応用！なんてこともあるかも知れません。）私は 5 年間静岡県でヤマネの調査をしてきましたが、5 年目に初めて出会ったヤマネは、まさに「ねぼすけ」状態。調査用の巣箱の中でぐっすりと眠っていました。私が指でつついたり、写真を撮ったりしても、「あんた誰？私眠いのよ～」とでも言っているように、眠そうにこちらを見つめていました（写真）。ところが、しばらくモゾモゾしていたら、だんだん動きが活発になって、突然すごい早さで巣箱を飛び出し、あっという間に森の中に消えてしまいました。文献によると夜間活動中のヤマネは、木から木へ枝から枝へ高速移動し、1m くらいの距離は飛び移ることができるといいます。8 cm の体で 1m ということは、自分の 10 倍以上の距離！前述の名前でなく、「俊足鼠」とか「跳躍鼠」なんて名前をつけてあげたいぐらいです。ヤマネのお食事メニューは、主に昆虫（ガ・ハチ・トンボなど）や果実（アケビ、ヤマブドウなど）で、他にも花の蜜や花粉を食べます。消化吸収が良く、固くないものが好きで、これは内臓の発達や歯の構造に関係があります。逆にヤマネをお食事メニューとしている生き物は、フクロウやヨタカ、ヘビなどで、冬眠中のヤマネはテンやキツネ、モグラやネズミにも捕食されることがあるそうです。

ヤマネの生息にとって大切な条件は、昆虫がたくさんいて果実のなる森林があることや、樹洞があり湿度の高い比較的成熟した森林があることといえそうです。静岡県では、南アルプス、井川、梅ヶ島、山伏、樽峠、富士山などの森林で生息が確認されています。しかし情報が少なく、詳細はまだわかりません。調査をするために、山に出かけても、ヤマネの生息に適した森林が少なく、調査する場所を見つけるのが大変でした。調査努力量と発見率から考えてみても、個体数は少ないのではと予想しています。

ヤマネは長い間、高山の生き物と考えられてきました。雪が降る高山の落葉広葉樹林で多く発見されてきたからです。ところが最近、温帯照葉樹林にも生息していることがわかってきました。静岡県内でも前述の山間地の他に伊豆の南方の温帯林でも発見されています。この照葉樹林のヤマネは、冬季も活動するとか、目の周りが黒い傾向があると言われていて、生態も形態も高山のヤマネと違うのではと考えられています。また、沖縄にもヤマネがいるかもしれないという可能性にも結びついていて、今、ヤマネの研究者たちは心を熱くしています。

静岡県だけでなく日本全体を見てもまだまだわからないことが多いヤマネ。小さくて愛らしいこの生き物が 100 年後の日本の森の中で、寝ぼけ眼と俊足で暮らしていることを願ってやみません。

静岡県版 レッドデータブック

本誌 3～4 ページでも紹介しましたように、平成 9 年度から行ってきた県内野生生物の生息・生育実態調査を基にして、静岡県は平成 15 年 4 月 14 日にレッドリストを公表しました。そしてこの度、県内の生物多様性を保全するための基礎資料となる「まもりたい静岡県の野生生物—県版レッドデータブック—」を発行、販売しました。本書には静岡県下に生息する野生動植物の現状が詳しく記載されております。レッドリストはそれ自体が法的規制等の強制力を持つものではありませんが、効果的な保護対策を推進できるよう、野生生物のおかれている状況を広く一般に理解してもらうために情報提供するものです。

本書作成のための部会員および調査員には、NPO 自然博ネットの会員の皆様方も多く参加され、特にレッドデータブック作業委員会委員、部会長のほとんどの方が本 NPO 会員であるといっても過言ではないでしょう。

なお、静岡県版レッドデータブックは、学術版（動物、植物）、普及版の 3 種が発行されて

います。入手を希望される方は、県下の大型書店で購入するか、下記の出版社へお問合せください。

静岡県版レッドデータブック学術版（A4 判）
各 3500 円

- 「まもりたい静岡県の野生生物—県版レッドデータブック—（動物編）」
（県版レッドデータリストに掲載の動物 385 種すべての解説）
- 「まもりたい静岡県の野生生物—県版レッドデータブック—（植物編）」（県版レッドデータリストに掲載の植物 663 種すべての解説）

静岡県版レッドデータブック普及版（A5 判）
1500 円

「まもりたい静岡県の野生生物—静岡県版
レッドデータブック—（普及版）」
（県版レッドデータリスト掲載 1,048 種の
うち主要な 123 種の解説）

出版社：羽衣出版有限会社

電話番号：054-238-2061

ファクシミリ：054-238-2072

E-mail：hagoromo@guitar.ocn.ne.jp

■緊急提案■

静岡県版レッドデータブックのデータと標本の保存を！

5 月 17 日の NPO 自然博ネットの理事会で、静岡県版レッドデータブックに掲載された種についてだけでも標本の保存と標本の公開をしていきたいという提案があり、検討されました。

静岡県版レッドデータブックは発行されましたが、その調査にあたって収集されたデータや収集された標本の多くは、調査に携わった方々が個人的に保管されている場合が多く、静岡県として保管されていない状況にあります。これらのデータや標本はレッドデータブックの基礎資料として重要であり、散逸する前にしかるべく公的に保管する必要があります。

NPO 自然博ネットでは、静岡県版レッドデータブックの調査データと採集された標本の所在を早急に確認し、保管する方法を検討していきたいと思います。また、レッドデータブックに掲載された種についてだけでも、標本の保管と標本の公開を進めるように、静岡県版レッドデータブックの発行を推進した自然保護室や自然学習資料保存事業を実施している県企画部に提言して、実現したいと思います。

田辺 積氏 「静岡県の化石」展

昨年度には県の実施している自然学習資料保存事業に協力して掛川層群の化石資料を数千点提供してくださった袋井市の田辺 積さんが、今年の7月22日～31日（午前9時～午後5時、31日は午前中で終了）に、袋井市役所2階の市民ギャラリーで、「静岡県の化石展」を開催します。この展示会は、NPO 自然博も共催しています。

NPO 自然博では、この展示会にあわせ袋井化石見学会を7月25日に開催し、その中で「静岡県の化石展」の見学も行います。

田辺さんが数年前までに採集されたほとんどの化石標本は、現在自然学習資料保存事業で

受入作業のためにお預かりしていますが、その後には採集し、クリーニング、さらに整理された標本がなんと約 15,000 点あり、これを一挙に今回展示されるということです。

掛川の化石を約 20 年間採集しつづけてこれ、それを多くの方々に見ていただき、また普及のために活用していただこうという田辺さんの強い思いが、標本ひとつひとつから伝わってきます。

今回の展示会では、国内で初めて発見されたショクコウラ（巻貝）化石なども出展されますが、特に同じ場所から採集された同じ種の多数の標本がまとまって展示されます。

本号の表紙と裏表紙の写真は、田辺 積氏の「静岡県の化石展」のために準備した化石の展示を掲載させていただきました。

図書紹介

標本学

自然史標本の収集と管理

国立科学博物館 編

東海大学出版会 250 ページ 2800 円



現在静岡県では自然学習資料保存事業を行っていますが、ちょうどその事業にぴったりな本がそれもタイムリーに出版されました。

この本では、植物から動物、地学にわたる自然史標本についての、その収集と標本化、さらに保管と管理、登録とデータベース化などについて、実際に博物館でどのように行われているかという実例をもとに、詳しく解説されています。

各分野の執筆者は、国立科学博物館を中心に他の博物館の研究者や学芸員が担当しています。各分野で収集から標本化、または受入れから登録、標本の保存など、重点をおいて書かれているところはさまざまですが、博物館で保存管理されている標本がどのように収

集され、受入れられて、標本になり、さらに登録、管理されているかなど、全体像が十分に理解できます。また、それぞれの分野については、その標本化とその管理の詳細がマニュアル的に実際にあわせて解説されていることから、標本を取り扱う者にとってとても役立つものとなっています。

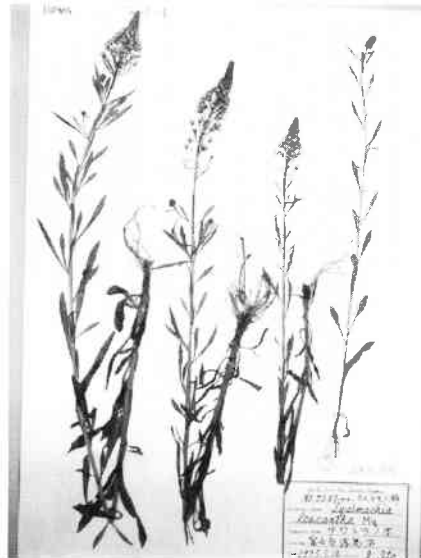
この本は、自分の専門分野の標本の取り扱いについて再確認するためにも、また他分野の標本の取り扱い方を知るためにも、重要な一冊になると思います。

（柴 正博）

コレクション紹介 (2)
伊藤二郎氏の植物標本
杉野 孝雄



ソナレセンブリ



サワトラノオ



トキワマンサク

自然学習資料保存事業で、静岡県の寄贈標本第1号となったコレクションです。伊藤二郎氏は静岡大学名誉教授、NPO 自然博ネットの理事で、本会の前身であった、静岡県自然史博物館設立推進協議会の代表です。

標本の保存状態は良好で、「牧野新日本植物図鑑」に従い標本番号を付し、分類順に整理され、1点ずつ台紙に貼ってあるので、整理と受け入れ作業は容易に行うことができました。また、自然学習資料保存事業を行うに当たってのモデルとされたコレクションです。

コレクションの内容は、1992年以降に採取された標本がほとんどで、総数は3085点、そのほとんどは種子植物標本で2792点、その他、シダ植物標本204点、コケ植物・藻類・地衣類標本89点となっています。産地別では、静岡県内で採取された標本が2635点、県外標本440点、それに、若干の産地不明標本があります。

絶滅種は含まれていませんが貴重種としては、絶滅危惧ⅠA類のソナレセンブリ、絶滅危惧ⅠB類のヒキノカサ、トキワマンサク、サワトラノオ、ミズネコノオ、絶滅危惧Ⅱ類のミズニラ、セツブンソウ、イワタカンアオイ、マツノハマンネングサ、キスミレ、オオアブノメ、

スズメハコベ、ウラギク、イズドコロなどがあります。

静岡県に分布する植物は「静岡県植物誌」(1984)にまとめられていますが、その中に記載されていない標本では、アツミゲシ(1993)、コタネツケバナ(1994)、イリオモテニシキソウ(1994)、ヤクナガイヌムギ(1992)、ミズヒナゲシ(1997)など、外来植物の静岡県内の侵入年代を知ることのできる標本もあります。()内は採取した年。

一般の種類を万遍なく集めるようにされていたようで、貴重種の種類は少ないですが、貴重種ばかりを集めることに熱心で、植物研究の本質からはずれた収集が多い中で、本筋に従ったコレクションといえます。

近年、生物学の進歩でDNA分析などが盛んに行われていて、普通種の産地別の多数の標本も必要となっています。また、普通種の中にも絶滅危惧に向かっていている植物もあります。普通種も含めた、同一種の各地の植物を標本として保存することが求められています。

静岡県の寄贈標本となった、伊藤二郎氏のコレクションは生物学研究の資料として、広く活用されることが期待されます。

夏から秋にかけての開催行事のご案内

三島ミニ博「静岡県の自然」

静岡県が自然学習資料の保存事業を行っている県教育委員会三島分室の資料保存室で、今年の夏休み、8月23日（月）～29日（日）にかけて、静岡県の自然や保存標本の展示会「三島ミニ博『静岡県の自然』」を開催します。この催しは、自然学習資料の保存事業を広く知っていただき、私たちの活動を一般の方々に理解していただくために行うもので、会員のみなさんのご協力をよろしくお願いいたします。

この展示会では、当 NPO の各分野の専門家によるギャラリートークや、標本作製の講習会、夏休みの自由研究相談などもあわせて行います。まだギャラリートークと講習会の内容とその日程は決まっていますが、決まり次第、ホームページで公表するとともに、会員にご連絡します。

また、当 NPO に参加されているそれぞれの研究会で、この機会に発表会や談話会も開催していただければと思いますので、希望のあるところは事務局までご連絡ください。

長野県自然保護研究所の見学

県に自然環境研究所としての自然史博物館の役割も考慮して、そのような施設として長野県自然保護研究所を視察します。県立の「長野県自然保護研究所」は、長野県の自然について調査、研究しているところです。

1 日目はここを視察見学し、その日は戸隠に宿泊。翌日、戸隠森林植物園などで観察会を実施します。レンタカーで行くため、人数に制限がありますので、参加希望の方は、締切りを守ってご連絡ください。

期 日：平成 16 年 9 月 3 日（金）～4 日（土）
場 所：長野県自然保護研究所

長野市北郷 054-120 TEL026-239-1031

予 定：9 月 3 日 朝 静岡発（レンタカー）
午後 研究所視察
9 月 4 日 午前 戸隠森林植物園観察
昼 戸隠そば 午後 7 時頃解散
宿 泊：戸隠「だいだらぼっち小屋」
TEL0263-39-2628
費 用：15,000 円（1 泊 2 食込）予定
申込み：人数は最大 20 名まで
申込み方法：葉書、メール、ファックスにて
事務局（三宅）まで（締切 8 月 21 日）
〒424-0878 静岡市清水御門台 10 番 13 号
TEL & Fax 0543-46-6735
E-mail：office@spmnh.jp

親子・こどもの国 地底わくわく探検

富士山こどもの国を利用した一般募集の普及活動を 10 月 17 日（日）に予定しています。

静岡県立こどもの国には、8000 年前に活動を終えた曾比奈溶岩流と砂沢溶岩流が基盤となり、約 6000 年前に頂上噴火した勢子辻溶岩流と、その上に重なる日本ランド溶岩流、さらにその上に重なる約 2,500 年前に流れた小天狗溶岩流が分布しています。これらの溶岩流の分布のようすや溶岩トンネルなどさまざまな溶岩の産状が観察できます。

午前中は、富士山の生い立ちを学び、午後はこどもの国の中を溶岩流を観察しながら歩きます。昼食はみんなで楽しくバーベキューをします。管理棟で当日、静岡県の化石や溶岩などを展示します。

8 月～9 月にかけて以下の要領で一般募集します。申込み先など詳細は決まり次第、ホームページなどで公表するとともに、会員にご連絡します。

参加者目標数：100 名

参加費：大人 2000 円、小中学生 1000 円